

# こうはい い もの 荒廃をもたらす忌まわしき者

キリストは警告しました。「預言者ダニエルによって語られた、荒廃をもたらす忌まわしき者が、聖なる地に立っているのを見たなら（これを読む者に理解させ）、その時ユダヤにいる者達を山に逃がしなさい...なぜならその時、世の始まりから未だかつて無く、二度と起こりえない大いなる艱難が到来するからだ。それらの日々が短縮されなかったら、誰一人として救われる事はないだろう。」（マタイの福音書24章15-22節）明らかに、「荒廃をもたらす忌まわしき者」の到来は、大いなる艱難の始まりを意味する最も重要な出来事です！しかし、それは一体何なのでしょう？そして、それは何処で起きるのでしょうか？誰もしくは何を象徴するのでしょうか？我々がそれを目撃するのはいつなのでしょう？マタイは「これを読む者に理解させ」と警告しました。ですから神は私達に、未来の歴史で最も重要な出来事の一つを無視するのではなく、キリストの意図した事を理解する事を求めておられるのです。

ガーナー・テッド・アームストロング 著

キリストの「荒廃をもたらす忌まわしき者」という奇妙な警告は、文字通り「荒廃をもたらす者の憎悪」を意味し、専門家達の間では、エルサレムを破壊または「荒廃させる」者によって、聖地に祭り上げられる偶像、あるいは偶像崇拝の道具であると意見が一致しています。

「忌まわしき者」とは神が忌み嫌う何かであり、ヘブライ語の **Shakaz** に由来します。**Shakaz** とは、神の代わりに崇拝される人か物といった偶像を意味します。

キリストはダニエル書に書かれているものと同じものについて語っているのだとはっきり仰りました。ダニエルの預言に「忌まわしき者」という言葉は度々現れます。ダニエル書9章27節や11章31節、12章2節等が例として挙げられます。これらの書物は忌まわしき者の正体を象徴的に解き明かしています。

ダニエルの預言について、キットはこう言っています。「これはアンティオコス・エピファネスが神殿を汚した事の預言であったように見えます。彼は焼かれた捧げ物の

さいだん うえ ぐうぞうすうはい さいだん た しんでん ほうし かみ  
祭壇の上に偶像崇拜の祭壇を建て、その神殿が奉仕する神ジュピター・オリンポスに  
けが もの ささ い  
汚れた物を奉げたと言われています。」（ジョン・キットの **Encyclopaedia of Biblical Literature** 第1巻 22ページより）

けもの ほん つの あいま は ちい つの か  
ダニエルは獣の10本の角の合間に生えてくる「小さな角」について書いています。  
けもの せいふ しばいしゃ しょうちょう にん おう たお しんせい  
獣は政府または支配者の象徴であり、それは3人の王を倒し、ついには神聖ローマ  
ていこく にん しどうしゃ うえ くんりん こと ちい つの  
帝国の7人の指導者の上に君臨する事になるとされています。この「小さな角」につ  
いては後に更に詳しくお話ししましょう。

こうはい い もの もの か  
荒廃をもたらす忌まわしき者とそれをもたらす者について、ダニエルはこう書いてい  
ます。「しかし、かれはぐんぜい おさ あ かれ ひび くもつ はいし  
然り、彼は軍勢の長にまでのし上がった。彼によって日々の供物は廃止され、  
せいち しつせい しよ しょう せつ  
その聖地は失墜させられた。」（ダニエル書8章11節）

かた たし かれ たいせつ  
The Critical and Experimental Commentary はこう語っています。「確かに彼らの大切  
なもの うば げんみつ しつせい こと  
な物は奪われたが、厳密にはアンティオコスによって「失墜させられる」事はなかつ  
た。それは、もっと大きな事態が未来に起こる事を意味する。アンティオコスは  
すうねんかん ひび くもつ きん じん ながねんきん しんでん  
数年間、日々の供物を禁じた。ローマ人にいたっては、それを長年禁じ、神殿を  
しつせい こくない しんこう か じん しんでん さいけん  
「失墜」させた。そして、国内の信仰に欠けたユダヤ人が神殿を再建し、モーゼの  
ぎしき と もど とき だい おうこく はん けったく ふたた おな こと  
儀式を取り戻した時、第4の王国である反キリストは、ローマと結託して再び同じ事  
く かえ だい かん  
を繰り返すだろう。」（ファウセットの **Emphasis mine** 第4巻427ページより）

しばい きげんぜんすうひやくねんまえ お こと かんが かれ しんでん  
アンティオコスの支配が紀元前数百年前に起こった事を考えれば、彼の神殿への  
ぼうとくこうい しゅうえん とき かた よげん ぜんちょう こと あき  
冒瀆行為が、終焉の時を語ったダニエルの預言の前兆でしかなかった事は明らかで  
す。（ダニエル書12章4-11節）

にばんめ ぜんちょう ふくいんしよ しょう せつ けいこく すこ あと お  
二番目の前兆はマタイの福音書24章15節のキリストの警告の少し後に起こりま  
した。ティトス軍によるエルサレムの破壊がそれです。「これは高い可能性で、ユダ  
じん ぐうぞう けいい あら かか と し ぐん  
ヤ人が偶像とみなすものに敬意を表わすイメージを掲げた都市への、ローマ軍による  
しんこう こと おも ぐん よそうがい てつたい こんわく きゅうせいしゅ よげん ところ  
侵攻の事であると思われます。ローマ軍の予想外の撤退と困惑は救世主の預言を心  
と ものたち よげん ふく めいはい したが きかい ちゅう しょ  
に留めた者達に、預言に含まれた命令に従う機会をあたえました。（注：マタイ書  
しょう せつ やま ひなん けいこく こと だい かん  
24章16節の『山へ避難せよ』というキリストの警告の事）」（キット第1巻22  
-23ページより）

ほかにも、後に皇帝ハドリアンによって成された、更に詳細に富んだ聖地の冒涇もありました。ハドリアンはユダヤ人を侮辱する事を学び、彼らが忌み嫌う猪の像を、エルサレムの廢墟の上に建設されたベツレヘムゲートの上に据えた (Euseb. Chron., 1, i. p. 45, ed. 1658)。そしてハドリアンはユダヤ教の教会の要地にジュピター・オリポス神の神殿を建て、自らの肖像を最も聖なる地の一部として据え置いた。(ibid、第1巻23ページより)

長き歴史の中で起こったこれらの忌むべき事柄は、キリストの終末の預言にはあてはまりません。キリストのオリヴェットの預言の時間設定をもう一度思い出して下さい。

「ですから、荒廢をもたらず忌まわしき者が聖地に立ちはだかるのを見たら、エルサレムにいる者達を山へ逃がしなさい。なぜならその時、この世の始まりから今だかつて無く、そして二度と起こらない『大いなる艱難』が起こります。それらの日が(神の啓示や聖なる介入、疫病、キリストの再来などによって)短くされなかつたら、誰一人として救われる(生き残る)事はないだろう。しかし、選ばれし者達の為に、その期間は縮められるだろう。」(マタイの福音書24章15-22節)

なかつたら、誰一人として救われる(生き残る)事はないだろう。しかし、最後の冒涇が「聖なる地」で引き起こされる事についての警告は、大いなる艱難の始まりに直接関連しています。その特徴の一つに恐ろしい諸聖人の殉死があります。(ダニエル書7章20-21節とマタイの福音書24章9節)

覚えておいて下さい! 「これら全てが悲しみ(艱難)の始まりなのだ。」

大いなる艱難とは何なのでしょう?

キリストは、艱難とは歴史上他に類を見ない時であると言いました。ダニエル書にはこう記されています。「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。そして、艱難が訪れるだろう。国が始まって以来、かつてなかったほどの艱難が。しかしその時、あの書に名が記されているお前の民全ては救われるだろう・・・」(ダニエル書12章1節)

そのような事が二度も起こるはずはありません。それは、干ばつ、飢饉、伝染病の流行や、恐ろしい殺傷兵器の戦争での使用といった、文明が始まって以来起きた最悪の「事態」を凌駕するものなのですから！

でも待って下さい。ダニエルは「そしてその時…」と言っています。（ダニエル書12章1節）一体「どの」時なのでしょう？各章を隔てる間が、ダニエル書11章40節を一貫的に考え理解する事の妨げになっているのです。ダニエル書11章40節から45節までの5節を注意深く読んで見て下さい。

「南の王」はその昔、エジプトの王プトレマイオスとされてきた。それはシリアに戦争をしかけたファラオに比べて少し小さな王朝でした。シリアとエジプトはアレキサンダー大王の死後残った四つの小国の内の2つでした。（ダニエル書11章4節）「北の王」は結果的に、典型的な荒廃をもたらす忌まわしき者を招きよせた、アンティオコス・エピファネスと同一の者とされました。

しかし、預言は明確に「終焉の時」という歴史上唯一の時を示しています。（ダニエル書11章40節）

従って、プトレマイオス・ソーテールやアンティオコス・エピファネスは、この終焉の預言を実現するであろう二人の指導者を、歴史的に表した典型でしかないのです。

おそらく「南の王」の役割を果たす人物はアラブの指導者でしょう。この者は、今に分かるように、聖書の獣と同一の「北の王」に対して「圧力をかける」でしょう。「圧力をかける」と言う表現は武力行使とまではいかないものです。政治的行為でしょうか？石油禁輸もしくはヨーロッパや世界のエネルギーの途絶か何かでしょうか？サダム・フセインのクウェート侵略、そしてその結果起こった約30カ国からなる軍事力のペルシア湾での集結の為、多くの人がサダムこそ「北の王」または「南の王」の役割を持つ者だと考えがちです。

確かに、サダム・フセインは他の国に「圧力をかけて」います。しかし、彼は「北の王」と呼ばれる誰か、もしくはその役割を今日果たしている、政治的または軍事的な指導者に対して「圧力をかけて」いますか？

答えは「ノー」です。フセインはアメリカ合衆国やイギリス、フランス、ドイツ、ソ  
ビエト連邦、イスラエル、日本、サウジアラビア、そして、全世界に「圧力をかけて」  
いるのです！サダム・フセインの行動に対する反応は、北の勢力によるイスラエル、  
エジプト、そして他の近隣諸国の制圧ではなく、何十万人もの軍隊によるサウジアラ  
ビアへの侵攻です。

「北の王」の対応は経済制裁を長引かせる事やペルシア湾での戦争ではなく、イスラ  
エルやエジプトを含めた地域の「多くの国々」を雷の様に攻め入っていく事である  
事にお気づき下さい。（ダニエル書11章40-42節）

現在の危機下において、イスラエルに侵攻すると脅しているのはヨーロッパやアメリ  
カ合衆国ではなく、イラクのサダム・フセインです。ダニエル書の11章40から  
45節を注意深く学んで、有り得ない結論に飛びつく人々に振り回されたり、「アル  
マゲドン」が近いなどとヒステリックになったりしないようにして下さい。

イスラエルとエジプトは終焉の時、「北の王」によってどちらも占領されています。  
ダニエル書の11章40から45節は、「北の王」がイスラム教の指導者である  
可能性を真向から否定しています。なぜなら、エジプトはイスラム教の国であるだけ  
でなく、その中でも最大のイスラム教信者数を誇る国であるからです。エジプトはア  
ラブ国家で現在キャンプデービッド合意を観察していますが、それでもエジプトは他  
のアラブ諸国と宗教や共感する思いを糧に結束を固め、イスラエルの「占領区域」  
からの武力撤退を働きかけています。エジプトを他のアラブの国が占領する事はあ  
りえません。エジプトは常にゲルマン勢力であった「神聖ローマ帝国」の最後の砦  
なのです！北の王とは預言に出てくる最後の獣の事なのです。

さて、この北の軍事勢力はいつイスラエルになだれ込んでくるのでしょうか？ダニエル  
は「終焉の時」と言っています。そして、第12章の一行まで読み進んでいくと、  
「その時」大天使長ミカエルが立ち、国が始まって以来、かつてなかったほどの艱難  
が始まるというダニエルの預言が見られます！言い換えると、それは大いなる艱難の  
事です。つまり、北の王がパレスチナに侵攻するのと時を同じくして大いなる艱難が  
始まるのです。

キリストの、<sup>こうはい</sup>荒廃をもたらし<sup>い</sup>忌まわしき<sup>もの</sup>者についての<sup>けいこく</sup>警告は<sup>ぐんたい</sup>軍隊によるパレスチナへの<sup>しんこう</sup>侵攻も<sup>ふく</sup>含んでいました。それらの<sup>ぐんたい</sup>軍隊は<sup>ダニエル</sup>ダニエル書の<sup>しよ</sup>11章<sup>しよ</sup>40から<sup>せつ</sup>45節において、<sup>きた</sup>北の<sup>おう</sup>王の<sup>ぐんたい</sup>軍隊として<sup>しる</sup>記されています。キリストは<sup>い</sup>こう言いました。「そしてエルサレムが<sup>ぐんたい</sup>軍隊に<sup>ほうい</sup>包囲されているのを見たら、<sup>み</sup>かの<sup>こうはい</sup>荒廃が<sup>ちか</sup>近い<sup>こと</sup>事を知りなさい。」（ルカの<sup>ふくいんしよ</sup>福音書<sup>しよ</sup>21章<sup>せつ</sup>20節）

<sup>だれ</sup>誰にこの<sup>おお</sup>大いなる<sup>かんなん</sup>艱難は<sup>ふ</sup>降りかかるのでしょうか？

キリストは<sup>けいこく</sup>こう警告しました。「その<sup>とき</sup>時（<sup>こうはい</sup>荒廃をもたらし<sup>い</sup>忌まわしき<sup>もの</sup>者が<sup>あらわ</sup>現れた<sup>とき</sup>時）<sup>ものたち</sup>ユダヤにいる<sup>やま</sup>者達を<sup>に</sup>山へ<sup>い</sup>逃がしなさい…」キリストは<sup>い</sup>こうも言いました。その<sup>ひなん</sup>非難は<sup>きんきゆう</sup>緊急を<sup>よう</sup>要し<sup>とつぜん</sup>突然やってくるので、<sup>だれ</sup>誰も<sup>いふく</sup>衣服や<sup>かぐ</sup>家具、<sup>また</sup>また<sup>もの</sup>食物で<sup>さえ</sup>さえも<sup>と</sup>取りに<sup>もど</sup>戻ってはいけな<sup>い</sup>いと！キリストは<sup>けいこく</sup>こう警告しました。「<sup>やね</sup>屋根に<sup>い</sup>いる<sup>もの</sup>者に<sup>じぶん</sup>自分の<sup>いえ</sup>家から<sup>もの</sup>物を取りに<sup>と</sup>降ろさせてはいけな<sup>い</sup>い。」

そして「<sup>はたけ</sup>畑に<sup>い</sup>る<sup>もの</sup>者にも<sup>また</sup>また、<sup>ふく</sup>服を取りに<sup>と</sup>家に<sup>いえ</sup>帰らせては<sup>かなら</sup>ならない」と。（<sup>ふくいんしよ</sup>マタイの福音書<sup>しよ</sup>24章<sup>せつ</sup>16-18節）

この<sup>けいこく</sup>警告に<sup>がいとう</sup>該当する<sup>ひとたち</sup>人達は<sup>まぢか</sup>間近に<sup>せま</sup>迫った<sup>こうげき</sup>攻撃を<sup>しゅうかんし</sup>週刊誌で<sup>よ</sup>読んだりする<sup>こと</sup>事も、<sup>よる</sup>夜の<sup>ニュー</sup>ニュースで<sup>それ</sup>それを<sup>な</sup>何ヶ月の間<sup>見る</sup>事もないで<sup>しょう</sup>しょう。なぜならそれは<sup>おどろ</sup>驚く<sup>べき</sup>べき<sup>さ</sup>速さで「<sup>とつぜん</sup>突然」や<sup>く</sup>って<sup>く</sup>来るから<sup>です</sup>です。キリストが<sup>そうてい</sup>想定した<sup>ばめん</sup>場面は、<sup>おとこ</sup>男が<sup>はたけ</sup>畑で<sup>しごと</sup>仕事をし、<sup>つま</sup>妻が<sup>おくじょう</sup>屋上で<sup>せんたく</sup>洗濯を<sup>ほ</sup>干している<sup>よう</sup>様な<sup>にちじょうてき</sup>日常的な<sup>ふうけい</sup>風景でした。

しかし<sup>とつぜん</sup>突然、<sup>だれ</sup>誰も<sup>よそう</sup>予想すら<sup>とき</sup>しない<sup>とき</sup>時に、<sup>まわ</sup>エルサレムの<sup>しんこう</sup>周りには、<sup>ぐんぜい</sup>侵攻する<sup>あらわ</sup>軍勢が<sup>あらわ</sup>現れる<sup>のです</sup>のです。

キリストの<sup>じだい</sup>時代のエルサレムでは、<sup>みんか</sup>民家は<sup>とな</sup>隣り<sup>あ</sup>合<sup>のき</sup>って<sup>つら</sup>軒を<sup>やね</sup>連ねて<sup>たい</sup>いました。屋根は<sup>きょうへき</sup>平らで、<sup>きょうへき</sup>胸壁も<sup>あり</sup>あり、<sup>ひとびと</sup>そこでは<sup>だんしよ</sup>人々が<sup>せんたくもの</sup>談笑したり、<sup>ほ</sup>洗濯物を<sup>こどもたち</sup>干したり、<sup>あそ</sup>子供達の<sup>あそ</sup>遊び<sup>ば</sup>場として<sup>つか</sup>使われたり、<sup>あつ</sup>暑い<sup>よる</sup>夜には<sup>ねどこ</sup>寝床となる<sup>こと</sup>事もあり<sup>ました</sup>ました。一般的に、<sup>いっばんてき</sup>家族は<sup>かぞく</sup>仮設住居を<sup>かぜつじゆうきよ</sup>木の<sup>こ</sup>葉や<sup>えだ</sup>枝で<sup>た</sup>建て、<sup>えんかい</sup>タバナクルの<sup>あいだ</sup>宴会の<sup>ちい</sup>間はその<sup>こ</sup>小さな<sup>こ</sup>小屋で<sup>く</sup>暮ら<sup>しました</sup>しました。

ラビ達は「<sup>やね</sup>屋根の<sup>みち</sup>道」という<sup>もの</sup>物を書き<sup>か</sup>記<sup>しる</sup>しています。人々は<sup>ひとびと</sup>連<sup>つら</sup>なった<sup>やね</sup>屋根の<sup>うえ</sup>上を<sup>ある</sup>歩き、<sup>いえ</sup>家の中に入る<sup>な</sup>事なく<sup>はい</sup>街道に<sup>かいどう</sup>降りて<sup>お</sup>いました。キリストは<sup>かれ</sup>彼の<sup>けいこく</sup>警告の中で<sup>なか</sup>これに<sup>げんきゆう</sup>言及<sup>しています</sup>しています。

ダニエル書の預言では、大いなる艱難は大天使ミカエルが立った時とされています。ミカエルは、イスラエルの王子である大天使として「汝の王子ミカエル」と認識されています。(ダニエル書10章20、21節)第12章では、ミカエルは「イスラエルの子供達」に味方すると記されています。彼らはイスラエルの貴族であったダニエルの民の子孫です。

キリストの預言にはその出来事が中東とパレスチナのエルサレムで起こるとははっきりと記されています！しかし大いなる艱難は世界規模のものとなるでしょう。なぜなら、キリストとダニエルが共に、それは「この世の始まりから今だかつてない」ものとなると言っているからです！彼はまた、この世界恐慌が神によって短くされなかったら、男女子供を問わず、誰一人生き残る事は無いとも言いました。(マタイの福音書24章21-22)ですから、エルサレムの出来事は艱難の始まりの兆しを示していますが、艱難はパレスチナとエルサレムの都市に限られているわけではないのです。

しかし、キリストの警告により、大いなる艱難が、荒廃をもたらす忌まわしき者の出現によって、エルサレムとパレスチナで始まるという事がはっきりと分かります。さらに詳しく言えば、その「忌まわしき者」は神殿に現れるのであり、そのような神殿はまだ存在していません。キリストの言い表した大災害はエルサレムそして現在「イスラエル」と呼ばれる国の周辺で始まります。キリストの深刻な警告は、ダニエル書の預言と共に、北の軍事勢力によってエルサレムが侵略される事を示しています。

しかしイスラエルのユダヤ人は一部族に過ぎません。それはおそらく、他の二つのユダヤの部族レヴィ族とシメオン族に連なるものです。従属部族であるヨセフ族、エフライム族、マナセ族を合わせて、全部で13の部族が存在しました。

ジェロボームの時代から独立した王朝と首都を有していた北の十部族は、ユダの捕囚よりもずっと前にアッシリアの王達に捕囚されました。紀元前721年から紀元前718年にかけて、その十部族は黒海とカスピ海の間の寒々とした大草原に姿を消したのです！ユダがバビロンに捕囚されたのは、約178年も後の紀元前540年になってからでした。

追放されたイスラム人の多くは二度とパレスチナへ戻る事はなく、川辺を沿ってヨーロッパやイギリス諸島へと移民したのです！

アブラハムの孫、ヤコブは度重なる神との遭遇の後、自身の名を「イスラエル」に改名しました。その詳細は上記の本に記されています。

ヤコブは12人の子供を持ち、それぞれが大きな部族にその名を冠する祖先となりました。ヤコブは改名した時から「イスラエル」と呼ばれました。子供達の一人、ユダはシメオンやレヴィと一緒に「ユダの家」と呼ばれるようになりました。一方でマナセ、エフライム、ガド、アッシャー、ダン、ナフタリ、ベンジャミン、ルベン、イサカル、ゼブルンは「イスラエルの家」を呼ばれるようになりました。この二つの家名が聖書で同じ様に使われる事は決してありません。この二つのまったく異なる王朝や領土、首都、言語、文化そして宗教などが詳しく書かれた本が現在4冊も在ります！

ユダの「ニックネーム」である「ユダヤ」が聖書で初めて使われた時、ユダヤ人はイスラエルと対立していました。

艱難に見舞われるのはイスラエルのユダヤ人のみならず

大いなる艱難は現在のイスラエルに住むユダヤ人だけではなく「ヤコブの家」また「イスラエルの家」にもやってくる事に注目して下さい。

「ああ！それは他に類を見ない大いなる日だ。（マタイの福音書24章15節やダニエル書12章1節の記述と完全に一致する比例無き時です）それはヤコブにとっても艱難の時だが、彼はそれから救われるだろう。」（エレミア書30章7節）

大いなる艱難とは一体何なのでしょう？それは恐ろしい近代兵器が飛び交う凄まじい戦争をもたらす何百万人の死、病気、飢饉、飢餓と言ったものです。それらはアメリカ合衆国、イギリス、カナダ、ヨーロッパ、オーストラリアや南アフリカ、そして、他の北西ヨーロッパ諸国に到来するでしょう。特に現在の「イスラエル」と呼ばれる国、つまりパレスチナにいるユダヤ人は多大な被害を受けるでしょう。

ティトス軍は先駆者でした



キリストのおもくる重苦しいオリブ山のさんよげん預言をもういちどみ一度見てみましょう。きょうかい教会とそのたてもの建物や壁についてかれはこうかた語りました。「これら全てのものがくみ見えますか？はつきり言うておこう。ひとつの石もここでくず崩れずに他の石の上に残る事はないだろう。」(マタイの福音書24章2節)その後、かれはこうつづ続けました。「そして、このおうこく王国の福音は、あらゆるみんぞく民族に(対する)たい証として、あかし全世界でぜんせかい宣教されるだろう。そしてしゅうえん終焉が訪れる。」(マタイの福音書24章14節)

キリストがし死ぬ前まえは、福音は少数の者にしかおし教えられていませんでした。かれはなぞいたくわ訓話で大勢におおぜい語りかけました。(マタイの福音書13章10-17章)そして、弟子達にはまだかれが福音をふくいん理解する時ときではないとせつめい説明していませんでした。

キリストが弟子達に、でしたちパレスチナからちちちきゅうち地球のさいは最果てまで福音をふくいんと説いてくるようつた伝えしたのは、キリストが復活のあと、弟子達の前にまたえ再びすがた姿をあらわ現した時ときでした。(使徒行伝1章7-8節)

せいれき西暦70年にいたるまで、ひかくてきしょうすう比較的少数のものたちかみおうこく王国の福音をき聞いたことがありましたが、それはせかい世界にあかし証を立てるためおしに教えられたのでは決してありませんでした。それでもキリストは、こうはい荒廃をもたらし忌まわしきものしゅつげんまえ出現前に必要ひつような勤めとして、これをつた伝え与えました。かみ神はあかしな証なくしてせかい世界を見放したりはしません。かみ神は決してだれにも、「でもあなたはおし教えてくださらなかった！」となげ嘆かせたりはしないでしょ。イスラエル家のけじゅうぶぞく十部族にぜんこく全国規模のげん罰がさしあつた時ときもそうでした。かみ神は、そのはかい破壊の前になんにん何人ものよげんしゃ預言者をつか遣わし、かれらのくわい傲慢さや神へのはんらん反乱、あんそくび安息日のむし無視やそれにともなぐうぞうすうはい偶像崇拜を、こえたか声高らかにしてきしげいこく指摘し警告しました。ユダにぐんバビロニア軍によるそのはかい破壊があつた時ときも、かみ神は幾人かのよげんしゃ預言者をつか遣わし、そのことしげいこく事を警告しました。エルサレムのていとすティトスによるはかい破壊がさしあつた時ときも、かみキリストがそのじだい時代の人々にそれをしげいこく警告しました。(マタイの福音書24章)ですから、きょう今日においても、かみ神はぜんせかい全世界にしげいこく警告を出し、しょうにん証人をおく送っているのです！

おお多くのいわゆる福音伝道者達は、ふくいんでんどうしやたち「甘いことば言葉を語り、うそ嘘をつく」(イザヤ書30章10節)事でことひとびと人々のな泣き叫ぶ声にこえ応えます。われわれこじん我々個人またはしゅうごうてき集合的なきをあつた悔い改めなければ、われわれくにぐに世界戦争によってぜんこく残酷なせいあつ制圧を受けるだろうと、ぐんしゅう群衆にねっしん熱心に

かた ものたち ど こ み しゅうかん ほうそう くじゅう せつきょうだい  
語る者達がいったい何処で見られますか？週刊のテレビ放送や、國中の説教台、ま  
たは宗 教に関する書物のなかですか？

けいこく がた く あらた みなおな よう ほろ  
キリストは警告しました。「あなた方も悔い改めなければ、皆同じ様に滅びるだろう」  
と。(ルカの福音書13章3節と5節)

ぐん しんこう なんひやくまん じん ぎやくさつ  
ティトス軍のエルサレムへの侵攻で、何百万ものユダヤ人が虐殺されました。

なか おお もの けいこく き  
しかし、その中の多くの者がキリストの警告を聞いていたのです。そればかりか、そ  
の後何年にもわたる神の忠実な使徒や使者達の警告をも聞いていたのです！彼らは悔  
い改める代わりにキリストを拒絶し、神の使者達を殺し、投獄しました。

ひなん こえ しんでん き い だいしさい  
(ヨセファスによると) 非難しなさいという声を神殿で聞いたと言う大司祭と、それ  
に続いてペツラへ逃げた数人のユダヤ人を除いて、その人口の大半が大虐殺を経験す  
ることとなりました。キリストの深刻な警告が現実のものとなったのです！

へいしたち きょうかい かべ ちょうじょう いし うば と きょうかい けつきよはかい  
兵士達は教会の壁の頂上にある石さえも奪い取りました。教会は結局破壊されて  
しまいました。しかしキリストは、大いなる艱難のすぐ後に、目覚しい天の徴が現  
れるだろうとはっきりと言いました。

おお かんなん あと たいよう かげ つき かがや うしな ほし いんせき てん お てん  
「大いなる艱難の後、太陽は陰り、月は輝きを失い、星(隕石)は天から墮ち、天  
の力は揺り動かされるだろう。」

ご ひと こ しるし てん あらわ とし ちじょう すべ ぶぞく も  
「そしてその後、人の子の徴が天に現れるだろう。その時、地上の全ての部族は喪  
に服し、人の子が力と大いなる栄光を携え天の雲に乗って来るのを見るだろう。」

(マタイの福音書24章27-30節)

ふくいんしよ しょう ふくいんしよ しょう ふくいんしよ しょう  
ゆえに、マタイの福音書24章、マルコの福音書13章そしてルカの福音書21章  
の預言には2面性があるといえます。一つは典型として早い段階で実現するものであ  
り、もう一つは、文字通り、最終的にの実現するものです。その住民が悔い改めな  
い限り、エルサレムは再び破壊される運命にあるのです。

ティトス軍によりエルサレムが破壊された時、天に徴はありませんでした。キリストが全能の神の力を行使したり、天を揺るがしたり、太陽を灰の様に陰らす事はありませんでした。

ですから、もう一つ別のエルサレムの破壊がまだやって来るのです！ 荒廃をもたらす忌まわしき者の出現はその兆候と成るのです。では一体誰がこの忌まわしき者を生み出すのでしょうか？

### ダニエル書の「小さな角」

バビロン、ペルシア、グラエコ/マケドニアそしてローマの、代々世界を支配してきた4大国はダニエル書の2章と7章に記されています。これらの王国の中で最後まで残った国、ローマについて、ダニエルはこう結論付けています。「しかし、いと高き者の聖者らが王権をうけ、王国を永久に治めるであろう。」（ダニエル書7章18節）

そしてダニエルはこう続けました。「その時私は、第四の獣（ローマ）の真実を知る事となる。それは他の獣と異なって、非常に恐ろしく、鉄の歯と青銅の爪を持ち、食らい尽くし、かみ砕き、残骸を足で踏みにじった。」

「その頭には十本の角があり、更に別の角（個別の「角」—政府または指導者を指す）が生え出たので、十本の角のうち三本が抜け落ちた。」（ダニエル書7章19-20節）

この預言は10本の「角」もしくは政府が、同時多発的なものではなく、連続して現れるものである事を示しています。この「小さな角」は生えてきた「別」の角である事から、それが他の10本の角に連なるものではない事は明らかです。

それについての記述に注目して下さい。「その（十本の）角を考察していると、もう一本の小さな角が生えてきて、先の角のうち三本はその為に引き抜かれてしまった（おそらくヴァンダルス、オストラゴス、ヘルリの事）。この小さな角には人間の様に目があり、また、口もあって尊大な事を語っていた。」

「なお見ていると、王座が据えられ、『日の老いたる者』がそこに座した。その衣は雪の様に白く・・・その御前から火の川が流れ出ていた。幾千人がその方に仕え幾万人が

みまえ た さば じゅんび ととの ちょうぼ ひら しょ しょう  
御前に立った。裁きの準備が整い、帳簿は開かれた。」（ダニエル書 7 章 8-10 節）

これは明らかにキリストの再来、千年統治の開始、そして最後の審判の日を指し示しています！しかし、この預言は他の10本とはっきりと異なる「小さな角」の出現で始まっています。その角はダニエル書の第7章で、他の先の3つの角（または政府）を覆して（または引き抜いて）います。

ファウセットは述べます。「それが生えた後反キリストは身を起こす。初めは『小さい』が、10本の内の三本を破壊した後、彼は他のどの角よりも強大になる。（20-21節）3つの角亡き後、その角は8番目の角になる。（黙示録17章11節を参照）他の7本よりも際立った頭を持っている。（Critical and Experimental Commentary、第4巻422ページ、emphasis mine より）」

さて、「口もあって尊大な事を語っていた」とはどういう事でしょう？

ダニエルは言います。「その獣には十本の角があり、更に一本の角（『小さい角』の事）が生え出たので、十本の角のうち三本が抜け落ちた。その角には（人の）目があり、また、口もあって尊大な事を語った。これは、他の角よりも大きく見えた。」

「見ていると、この角は聖者らと戦い、そして勝ってしまった！」（ダニエル書7章20-21節）艱難の時代、聖者は「携挙され」地球に残されていないという説や、特別な「聖者」が洞窟に隠れているという説はなんと的外れな事でしょうか。これは文字通り、反キリストの力によって殺される最後の二人の証人（黙示録11章7節）と教会の事（黙示録13章7節）を指している事にお気づき下さい。

この「小さな角」は神の真の教会を迫害する勢力の類いを意味しているのです！

ダニエル書7章には、「小さな角」によって操られる4番目の獣（ローマ）の描写と共に始まる預言が四つあります。その小さな角は三つの連なる政府を覆し、終焉の時まで存続し、教会を迫害し、最終的にはキリストの再来時、キリスト自らの手で破壊されるものです。

言い換えれば、聖書は「小さな角」を、キリストの再来時に神の民を迫害している勢力または政府と識別する事で、それが現れるタイミングをも示しているのです。

さて、一体どんな勢力または政府がこの迫害を行い、神の従者の殉教の責任は誰にあるのでしょうか？

「そして、彼（「小さな角」）はいと高き方に鋭い言葉を返し、いと高き方の聖者らを悩ます。彼は時世と法を変えようと企む。彼ら（聖者）はその手に落ち、一時（一年）、二時（二年）、半時（六ヶ月または半年）が経つ。（全部で三年半です）」

「やがて裁きの座が開かれ、彼はその権威を奪われ永遠に滅ぼされるだろう。」（ダニエル書7章25-26節）これは3年半のひどい迫害と殉教の期間を示しています！そしてそれは、艱難の開始からキリストの再来までを指す終焉の時の事なのです！

この「小さな角」は、時世や法を変える力を持った地位に座る、人間の指導者を象徴しているのです。

### 3年半

ダニエルは聖なる者がもう一人の者にこう聞いているのを耳にしました。「日々の犠牲と荒廃（荒廃をもたらす忌まわしき者）による破壊、そして、聖地が明け渡され、住む場所が踏みにじられるという、この予見は一体どれだけ続くのだろうか？」

「そして、彼は私に言いました。2300日を経て、聖地は清められるだろう。」（ダニエル書8章13-14節）

ですから、荒廃をもたらす忌まわしき者は動き出し、3年半もの間聖地を汚すのです！

ヨハネはこう記述しています。「そして、彼らは獣に力を授けた竜（サタン）を崇めた。さらに、人々はこの獣をも拝んでこう言った。『誰が、この獣と争う事が出来ようか？』」

「そして、彼には偉大な言葉と冒瀆を吐く口（反キリスト、つまり偽の預言者である『小さな角』と同じ口）が与えられ、四十二ヶ月の間活動する力が与えられた。」  
(黙示録 13 章 4-5 節)

反キリストが立ち上がり荒廃を開始した時、彼は3年半もの間それを続けるでしょう。

さらに注目して下さい。「それから、私は杖の様な物差し棒を与えられ、こう告げられた。立て、そして、神の神殿と祭壇とを測り、そこで礼拝している者達を数えよ。」

「しかし、神殿の外の庭はそのままにしておけ。測ってはいけない。そこは異邦人に与えられたからである。彼らは、四十二ヶ月の間、この聖なる都を踏みにじるであろう。」 (黙示録 11 章 1-2 節)

この3年半の間は、統率された福音の説教をする事は不可能です。神の教会は散り散りにされ、迫害されてしまいます。(アモス書 8 章 1 1 節) 殉教する者も居れば奇跡的に反キリストから守られる者もいるでしょう。

神はこう仰っています。「竜は、自分が地上へ投げ落とされたと分かると、男の子(教会)を産んだ女の後を追った。」「そこで、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。(神の奇跡の加護の象徴です。出エジプト記 19 章 4 節を参照のこと) 荒れ野にある自分の居場所へ飛んで行く為である。女はそこで、蛇から逃れて、一時、二時、そして、半時(三年半です!)養われる。」

「そして蛇は、口から洪水の様な水を女を追って吐き出し、彼女を押し流そうとした。」

「しかし、大地が女を助け、口を開けて、竜が口から吐き出した洪水を飲み干した。」

「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者達、すなわち、神の掟を守り、キリストの証を受け継ぐ者達と戦おうと出て行った。」 (黙示録 I、12 章 13-17 節)

ある者は、この「洪水」を歴史的観点から解釈しました。それは「小さな角」が神聖ローマ帝国を支配する期間の事であり、獣に跨る女の口から吐き出された、嘘で固めた教義、冤罪、そしてプロパガンダの「洪水」でもあるのです。

ある者はこれを文字通りに解釈しました。それは、サタンによって引き起こされる奇跡であり、紅海の例のように、神の民はそこから救い出されると。それが何を意味するにしろ、サタンは神の教会の破壊に失敗するのです。

それでも神の言葉は、反キリストである「罪なる者」に率いられた大いなる偽の教会が、神の聖者達を酷く迫害するだろうと言っています。大いなる艱難には、多くの神の僕が殉教する事も含まれているのです。（マタイの福音書24章9節と黙示録13章7節）

全ての神の民が守られるわけではありません。二人の証人が良い例です。彼らは特別に、獣と偽の預言者に関する警告の為、神の最後の二人の預言者として任命され、反キリストと獣によって殺されます。

二人の証人は、荒廃をもたらす忌まわしき者が君臨する、「聖域の蹂躪」と時を同じくしてその使命を果たします。

「私は、自分の二人の証人に粗布を纏わせ、千二百六十日の間預言させよう…彼等には、預言をしている間ずっと雨が降らないように天を閉じる力がある。また、水を血に変える力があって、望みのままに何度でも、あらゆる災いを地にもたらす事が出来る。」

「そして、二人が証言を終えると、底なしの穴から這い上がった獣が、彼らに戦いを挑み、打ち勝ち、殺してしまうだろう。」（黙示録11章3-7）

ある者は、教会全てが3年半の間「安全な場所へ移される」と思い込んでいます。それは明らかにありえません。二人の証人は神の真の教会に属してはいないのですか？彼らは「神の聖霊」によって導かれるが故に、霊的な「キリストの体」である教会のメンバーであるはずではないのですか？

それでも、神は二人の殉教を許します。

イスラエル人がゴシェンの土地にいる間、エジプト人とイスラエル人を「分け隔て」  
るために、神がエジプトに疫病をもたらした時もそうでした。死の天使がイスラエル人  
の民家を「通り越し」エジプトの初子を殺して行きました。神はその時約束しました。  
「あなたの傍らに一千の人、あなたの右に一万の人が倒れるだろう。だが、あなたに  
それが及ぶ事は無い。」（詩篇91章1-9節）

囚われのイスラエル人は、彼らの恐ろしい艱難の最中、神に泣き叫ぶ形で描かれて  
います。「さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂く事で、我々を癒し、  
打ちのめす事で、我々を団結に導くのだから。」

「二日（二年？民数紀14章34節とエゼキエル書4章6節を参照のこと）の後、  
主は我々を復活させ、三日目（三年目？）に、立ち上がらせて下さり、我々は主の  
見守る中生きるであろう。」（ホセア書6章1-2）

この預言はイスラエルの十部族への厳しい警告の中に見られます。特に、多くのヒン  
トからイギリスと分かる、エフライムの国に対して。

神はこう言いました。「懲戒の日（艱難）エフライムは廃虚と化す。確かに起こる事  
を私はイスラエルの諸部族に教えた…私は立ち去り、自分の場所に戻っていよう。  
彼らが罪を認めて、私を尋ねるまで。彼らは苦痛の中早々に私を探しに来るだろ  
う。」（ホセア書5章9-15節）

この大いなる艱難、天の徴と（黙示録6-7章）主の日は、どれもがこの三年半の  
内に起こるのです！荒廃をもたらす忌まわしき者が動き始めてから「完結まで」また  
は3年半後まで続くという事を覚えておいて下さい。二人の証人は3年半に渡って  
預言し、キリストの再来のほんの数日前に殺されるのです！聖域は3年半もの間「踏  
みにじられる」が、キリストの再来により「浄化される」のです！

これで良くお分かり頂けましたでしょうか。荒廃をもたらす忌まわしき者がいつ現  
れるのかに注意を配る事の大切さが。なぜキリストは、それが来た時にはユダヤ人に  
逃げるように警告したのかが。反キリストは何者かって？暴言を吐く人の口を持った、  
最後の「小さな角」とは誰の事かって？



それはとある<sup>きょうかい しどうしゃ</sup>教会の指導者である「偽<sup>にせ</sup>の預言者<sup>よげんしゃ</sup>」の事<sup>こと</sup>です！

大いなる<sup>おお</sup>偽<sup>いつわ</sup>りの教会<sup>きょうかい</sup>のシンボルである<sup>けもの</sup>獣<sup>またが</sup>に跨<sup>じよせい</sup>る女性

ここでヨハネの預言<sup>よげん</sup>を見て下さい。「そして、この天使<sup>てんし</sup>は私<sup>わたし</sup>を<sup>れいたい</sup>霊体<sup>かたち</sup>という形<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>荒れ野<sup>あ</sup>に連れて行った。私<sup>わたし</sup>は、真紅<sup>しんく</sup>の獣<sup>けもの</sup>にまたがっている一人<sup>ひとり</sup>の女<sup>おんな</sup>を見た。この獣<sup>けもの</sup>は、全身<sup>ぜんしん</sup>至<sup>いた</sup>るところ<sup>ところ</sup>神<sup>かみ</sup>を冒流<sup>ぼうとく</sup>する数々<sup>かずかず</sup>の名<sup>な</sup>で覆<sup>おお</sup>われており・・・」(黙示録<sup>もくしやく</sup>17章<sup>しょう</sup>3節<sup>せつ</sup>)

女<sup>おんな</sup>は教会<sup>きょうかい</sup>の象<sup>しょう</sup>徴<sup>ちゆう</sup>として使<sup>つか</sup>われています。この場合<sup>ばあい</sup>は背教<sup>はいきょう</sup>の教会<sup>きょうかい</sup>、すなわち、神<sup>かみ</sup>を冒流<sup>ぼうとく</sup>する名<sup>な</sup>に覆<sup>おお</sup>い尽くされた、淫<sup>みだ</sup>らな女<sup>おんな</sup>として描<sup>か</sup>かれた、サタン<sup>しはいか</sup>の支配<sup>しはいか</sup>下<sup>か</sup>にある教会<sup>きょうかい</sup>の事<sup>こと</sup>です！「・・・七<sup>なな</sup>つの頭<sup>あたま</sup>と十<sup>じゅう</sup>本の角<sup>つの</sup>を持<sup>も</sup>っていた。女<sup>おんな</sup>は紫<sup>むらさき</sup>と赤<sup>あか</sup>の衣<sup>ころも</sup>を着<sup>き</sup>て、金<sup>きん</sup>と宝<sup>ほう</sup>石<sup>せき</sup>と真<sup>しん</sup>珠<sup>じゆ</sup>で身<sup>み</sup>を飾<sup>かざ</sup>り、憎<sup>ぞう</sup>悪<sup>お</sup>やその淫<sup>みだ</sup>らな身<sup>み</sup>の汚<sup>よご</sup>れで満<sup>み</sup>ちた金<sup>きん</sup>の杯<sup>さかずき</sup>を手<sup>て</sup>に持<sup>も</sup>っていた。」(黙示録<sup>もくしやく</sup>17章<sup>しょう</sup>3-4節<sup>せつ</sup>)

この、サタン<sup>しはい</sup>に支配<sup>おお</sup>された大いなる<sup>いつわ</sup>偽<sup>きょうかい</sup>りの教会<sup>せかいじゆう</sup>は、世界<sup>おう</sup>中の王<sup>だいてうりゆう</sup>や大統<sup>しゅしゆう</sup>領<sup>しゅしゆう</sup>、首相<sup>しゅしゆう</sup>と繋<sup>つな</sup>がりを持<sup>も</sup>っています。それは、自<sup>みづか</sup>らの政<sup>せい</sup>策<sup>さく</sup>を他<sup>ほか</sup>の多<sup>おほ</sup>くの国<sup>くに</sup>や文<sup>ぶん</sup>化<sup>か</sup>に押<sup>お</sup>し付<sup>つ</sup>ける、政<sup>せい</sup>治<sup>じ</sup>的<sup>てき</sup>な教会<sup>きょうかい</sup>なのです。神<sup>かみ</sup>はこ<sup>お</sup>うい<sup>お</sup>った行<sup>おこな</sup>い<sup>せい</sup>を政<sup>せい</sup>治<sup>じ</sup>的<sup>てき</sup>淫<sup>いん</sup>行<sup>こう</sup>と呼<sup>よ</sup>んでいます！

さら<sup>さら</sup>に、「・・・その額<sup>ひたい</sup>には、秘<sup>ひ</sup>められた意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>の名<sup>な</sup>が記<sup>しる</sup>されてお<sup>お</sup>り、それは、『大いなるバビロン<sup>おお</sup>、淫<sup>いん</sup>婦<sup>ぶ</sup>達<sup>たち</sup>や、地<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>の忌<sup>い</sup>まわしい者<sup>もの</sup>達<sup>たち</sup>の母<sup>はは</sup>』というものであ<sup>あ</sup>った。」とありま<sup>ま</sup>す。(黙示録<sup>もくしやく</sup>17章<sup>しょう</sup>5節<sup>せつ</sup>)

これは偉<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>な母<sup>はは</sup>なる教会<sup>きょうかい</sup>ですが、そこ<sup>い</sup>から出<sup>むす</sup>でた娘<sup>かのじよ</sup>達<sup>たち</sup>は彼<sup>かのじよ</sup>女<sup>じよ</sup>に異<sup>い</sup>議<sup>ぎ</sup>を唱<sup>とな</sup>えます！  
彼<sup>かのじよ</sup>女<sup>じよ</sup>は娼<sup>しょう</sup>婦<sup>ふ</sup>の様<sup>よう</sup>な服<sup>ふく</sup>を着<sup>き</sup>て、神<sup>かみ</sup>を冒流<sup>ぼうとく</sup>する名<sup>な</sup>や肩<sup>かた</sup>書<sup>が</sup>き<sup>つか</sup>を使<sup>なぞ</sup>い、謎<sup>なぞ</sup>に包<sup>つつ</sup>まれた教<sup>きょう</sup>義<sup>ぎ</sup>を教<sup>おし</sup>えます。

彼<sup>かのじよ</sup>女<sup>じよ</sup>の「謎<sup>なぞ</sup>めいた宗<sup>しゅう</sup>教<sup>きやう</sup>」は、古<sup>こ</sup>代<sup>だい</sup>バビロ<sup>ばびろ</sup>ンの物<sup>もの</sup>と同一<sup>どういつ</sup>で、それ<sup>なぞ</sup>は、バビロ<sup>ばびろ</sup>ンの謎<sup>なぞ</sup>めいた宗<sup>しゅう</sup>教<sup>きやう</sup>と統<sup>とう</sup>一<sup>いつ</sup>された都<sup>とし</sup>市<sup>せい</sup>や政<sup>せい</sup>府<sup>ふ</sup>を築<sup>きず</sup>き上<sup>あ</sup>げた、セミラ<sup>せみら</sup>ミスとニムロ<sup>にむろ</sup>ッドの時<sup>とき</sup>ま<sup>ま</sup>で遡<sup>さかのぼ</sup>ります。

彼<sup>かのじよ</sup>女<sup>じよ</sup>の主<sup>おも</sup>なシンボ<sup>しんぼ</sup>ルは太<sup>たい</sup>陽<sup>やう</sup>で、「イシュ<sup>いしゅ</sup>ター<sup>たー</sup>ル」(セミラ<sup>せみら</sup>ミス女<sup>じよ</sup>王<sup>おう</sup>を意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>する)に奉<sup>ささ</sup>げら<sup>ら</sup>れた東<sup>ひがし</sup>に上<sup>のぼ</sup>る太<sup>たい</sup>陽<sup>やう</sup>にお辞<sup>じ</sup>儀<sup>ぎ</sup>をしていま<sup>ま</sup>す。「イシュ<sup>いしゅ</sup>ター<sup>たー</sup>ル」は今<sup>きん</sup>日<sup>にち</sup>では「イース<sup>いす</sup>ター<sup>たー</sup>」と発<sup>はつ</sup>音<sup>おん</sup>されてお<sup>お</sup>り、神<sup>かみ</sup>の安<sup>あん</sup>息<sup>そく</sup>日<sup>び</sup>ではな<sup>な</sup>く日<sup>にち</sup>曜<sup>やう</sup>日<sup>び</sup>に崇<sup>すう</sup>拝<sup>はい</sup>されていま<sup>ま</sup>す。オーブ<sup>おーぶ</sup>や

きゅうこん よう せいしよく しょうちよう いきよう しよう みと た  
球根の様な生殖を象徴する異教のシンボルの使用が認められており、その他、ユ  
リやハエ、卵といった無数の古の異教の象徴を使用します。

かのじよ つね かみ しんり たたか かみ しもべ ものたち しいた  
彼女は常に神の真理と戦い、神の僕となった者達を虐げてきました。キリストとそ  
の弟子達によって、常にニサンの14日の晩に行われた過越際や安息日を、頑なに  
守ろうとした信者が何千人も殺されました。彼女についての更なる記述を見てみま  
しょう。

わたし おんな せい ものたち ち しよにんたち ち よ  
「私は、この女が聖なる者達の血と、キリストの証人達の血に酔いしれているの  
を見た。この女を見て、私は大いに驚いた。」（黙示録17章5-6節）

しよぜんたい よ いただ おお いつわ きようかい けもの またが ぎよ  
この章全体を読んで頂ければ、この大いなる偽りの教会が獣に跨り、御し、そ  
れに影響を与えている事がお分かりになるでしょう。彼女は獣を構成する最後の  
十国を結びつけるのを手助けするでしょう。ダニエル書の第2章に出てくる10本  
のつま先の「陶土」は、彼女の影響力と教義の表れであり、それは十国を支配す  
るであろう、強力な「鉄」の軍事国家とは相容れぬ、虚弱な結合要素でもあります。

おお いつわ きようかい もくしろく しよ にぼんめ けもの どういつ  
では、この大いなる偽りの教会が黙示録13章の二番目の獣と同一のものである  
事にお気づき下さい。

わたし いっぴき けもの ちちゆう のぼ く み けもの こひつじ つの  
「私はまた、もう一匹の獣が地中から登って来るのを見た。この獣は、小羊の角に  
似た二本の角を持ち（それはキリストの様に見えた）、竜の様に喋っていた。（そ  
れはまるでサタンのようなだった。黙示録12章9節を参照のこと）」

けもの さいしよ けもの か ちからすべ こうし もくしろく しよ どうじよう  
「この獣は、最初の獣の代わりにその力全てを行使し（黙示録13章に登場した  
最初の獣はダニエル書第7章に登場した4番目の獣と同一であり、それは初期の  
ローマ皇帝達とローマの創立者ロムルスから、後の「神聖ローマ帝国」の時代  
の支配者に至る帝国ローマを象徴しています。）、地とそこに住む人々に、致命傷  
を癒した最初の獣を拜ませた。」（黙示録13章11-12節）

ちめいしよ うねん ていこく ほうかい こと かいふく さいこう  
この致命傷は476年のローマ帝国の崩壊の事であり、その回復は、ローマ再興に  
貢献したベルサリウス将軍が、北アフリカで勝利を収めた554年に起きた事です。  
ここで注目して頂きたいのは、時世と法を変え、冒流の名に満ち、神の聖者を

じゆんきやう お にせ しゆうきやうしどうしや ちい つの きせき お ちから  
殉教に追いやった偽の宗教指導者「小さな角」は、その奇跡を起こす力をサタン  
から授かっているとい言こう事すです。

「そして、彼は大いなる驚異を起こす。人々の目の前で天から地上へ火を降らせ、獣  
の加護による奇跡の力で地上の人々を欺く。彼は地上の人々に獣の像を作れと命じ、  
また、その像は言葉を話し（彼は「偉大な事を言う口）を持っています。）、その獣  
の像を崇拜しない者達は死ぬ事になると教えました。」（黙示録13章11-15節）

その指導者が絶対正義を主張し、その教義を確立する為に「時世と法」を変える  
権力を振るう、世界規模の大いなる教会は、あなたの知る限り何処にありますか？  
謎めいた式典を謎めいたシンボルや謎だらけの大掛かりな儀式を用いて行う、多くの  
言語や国に跨る世界規模の教会はどこでしょう？地政学や、多くの国々の人々に対  
する政治的な選択に多大な影響力を持った、偉大で強い力な政治団体でもある教会  
が在るのは何処ですか？

指導者達が淫乱を表す赤と紅色の衣を身に纏う偉大な教会があるのは何処ですか？  
その「永遠性」を誇示する教会があるのは何処ですか？

伝説にある「永遠の」街というのはどの都市でしょうか？「7つの丘」のあの街の事  
でしょうか？ヨハネはこう続けています。「七つの頭とは、この女が座す七つの丘  
の事である。」（黙示録17章9節）彼はこうも言いました。「あなたがみ見た女と  
は、地上の王達を支配するあの大きな都の事である。」（黙示録17章18節）

歴史の中で「地上の王達」を支配してきたと宣言出来るのはどの都市ですか？明らか  
にワシントンではないし、ロンドン、ベルリン、東京やモスクワでもありません。で  
は何処でしょう？その指導者が世界中の最も強い力な政権保持者達に礼を尽くされ、  
政変をもたらし、革命を起こさせる様な大規模なデモやストライキ、反乱を奨励する  
力がある教会があるのは何処ですか？

この大いなる偽りの教会はイザヤ書にも記述されています。

「私は永遠に女王だ、とお前は言い、これらの事を心に留めず、その結末さえ考え  
なかつた。」

「しかして今これを聞くがよい。快樂に浸り、安樂に暮らす女よ。心の中で、私は他に並ぶ者など居ない唯一の者であり（何という冒瀆でしょう！これは神を意味する言葉ではありませんか！）、やもめになる事なく、子を失う事もない、と言う者よ。」  
（イザヤ書 47 章 7－8 節）

他の者達に「母」と呼ばれる偉大な教会はどの教会でしょう？どの教会が、自ら出でた抵抗する娘達を持ち、彼女等を自身を持って取り戻すと誇示していますか？  
（彼女等は母と命運を共にする事になります。イザヤ書 47 章 9 節）

ヨハネの預言はこの偉大な教会が、彼女の願いを叶える為に、その力をどの様に振るうかを示しています。「彼には、獣の像に命を吹き込む力があり、獣の像を話せるようにし、獣の像を拝まない者を皆殺させた。」

「そして、大小や貧富の差、また、その身が自由か奴隷かを問わず、全ての者に右手（協力、同意、意思、そして、奉仕する事への誓いの象徴）か額（類似思考、協力、受諾、そして、同意の象徴）に刻印を押させた。そして、その刻印か獣の名、または獣の名を表す数字を有する者以外の売り買いを禁じました。」

「ここで知恵が必要である。賢い者に獣の数字を教えさせなさい。数字は人間を指している。そして、数字は666である。」（黙示録 13 章 15－18 節）

獣とは、ローマ帝国の時代から現代、そして、終焉の時にヨーロッパの中心で復活する不変の機関であるローマを指しています。それは、一つの偉大な宗教によって支配され、十カ国全てを操る力を持っています。

その「像」とは、ローマ帝国、主教管区、大主教管区、「コレギア」、または、「枢機卿会」等と同じ系統の建築物である教会の事であり、何の疑いもなく「ペテロの優位性」を主張する絶対的支配者なのです！

獣の「像」とは、教会の高さと影であり、その複製、コピーなのです。それでも、それは子羊の皮を被った宗教団体であり、竜やサタンのように言葉を話します！

それに従うという事は、それを表す印やシンボル、または刻印を受け取る事を意味します。

したがって獣の像は、古代ローマ帝国の政治構成に基づいた、大いなる偽りの教会の団体なのです。それは多くの人達に、仮初にも神聖視され敬われる人の指導者を宿します（ローマの皇帝達は自分達を神または神聖なる者と主張しました）。それは儀式や信仰を謎に包んだ教会であり、世界中の政府に政治的影響を持つ、それこそ他の国の様に完全なる政治的支配権を有する国の様な教会なのです。

今なら、ひどく墮落した女に跨られた10本の角を持った獣（「神聖ローマ帝国」と呼ばれる不変の組織の最後の復活体）と言う予見を理解して頂けると思います。

どのようにして偽りの教会は力を得たか

キリストによって創設された新約聖書教会では初めから（マタイによる福音書16章18節）内側からも外側からも（使徒言行録20章28-31節）、神の真の教会から「ユダヤ」に関連する物全てを取り除こうという動きが見られました。

これは、大勢の異邦人が、古代の異教の伝統に固執したまま、喜んでキリスト教に加わった事が原因でした。

新約聖書、特にパウロが書き記しているものや、黙示録第2章と第3章の中の「教会への手紙」は、本来の信仰の侵食についての話です。つまり、割礼の概念を受け入れず、キリスト教ではなくユダヤ教の教えを改宗者に押し付けようとした、ユダヤ人からの攻撃にまつわる話です。（コリントの信徒への手紙I、17章18-19節）

未だ若い新約聖書教会は、政府やユダヤ教の指導者、更には内と外からの背教者からの迫害に晒され続け苦しみました。

ガラテヤの信徒へ宛てたパウロの手紙には、彼らが「異なる福音」をこんなに早く聞き入れ、「異なるキリスト」に耳を貸した事への驚きが記されています。（ガラテヤの使徒への手紙1章6-8節）ポールはコリントの信徒を非難しています。彼らは異教徒の習慣に戻り、過越祭を酒まみれの騒々しい夜に変えたと。更に彼らが

しゅうだんない きんしんそうかん おおめ み こと た じぶんたち  
集団内での近親姦姦を大目に見ていた事にもふれています。パウロは絶えず、自分達  
の「ユダヤ人らしさ」を人に誇示する「偽の使徒」から自分の身を守ってきました。

(コリントの信徒への手紙II、11-12節)

しんやくせいしょ お にばんめ てがみ はいきょうしゃ しんぼ ほど しめ しん  
新約聖書の終わりから二番目のユダの手紙は、背教者の進歩の程を示しながら、真の  
キリスト教徒に「かつての信仰」に戻るよう訴えかけています。ユダの手紙は異教の  
信仰に戻った偽の教師に対する明確な警告です。彼等は、飲食や宴、乱交を  
宗教儀式に用い、その異教の巫女は「神殿の売春婦」としての役割を果たし、それは  
神との契りを象徴する行為であると主張しました。

およそせいれき 91年か92年ごろ、ヨハネがもくしろく か とき はいきょうしゃたち せいりよく  
は完全に近いものとなっていました。

きょうかい てがみ だい しょう だい しょう いきょう きょうかい にせ きょうぎ にせ  
教会への手紙の第2章と第3章では、異教によって、教会が偽の教義、偽の  
宗教  
しどうしゃ かつどう むしば ようす かいまみ こと でき  
指導者、そして偽りの活動に蝕まれていく様子を垣間見る事が出来ます。

しとげんこうろくだい しょう ほか きじゅつ はいきょうしゅうだん さいしょ しどうしゃ な あらわ  
使徒言行録第8章や他の記述は、この背教集団の最初の指導者と成るべくして現  
れたかもしれない男を描写しています。彼はローマの「ペトロ」を偽ったともいえ  
る、魔術師サイモンと言う人です。その男の話は本1冊分ぐらいの調査を必要とす  
るでしょう。しかし、おとこ か こ わす さ いま にせ よげんしゃ ぜんしん いがい  
あまり関係のない者とされています。

パウロはそだ さいらい はいきょうだんたい か にせ よげんしゃ さいらい  
の直前の最後の数日間に現れる事を明らかにしました！

だれ よう しゅだん もち だま ほうかい はいきょう こと  
「誰がどの様な手段を用いても、騙されてはいけません。なぜなら、崩壊（背教の事  
です！）がまず起こり、はめつ もう ご にんげん つみ あほ ことな ひ  
（キリストの再来）は来ないのですから。」

「この者は、もの かみ よ おが すべ ほんこう みずか ちょうえつ  
者であると息巻き、ついには、しん でん けんせつ しん でん  
に居座り、自分こそは神であると宣言します。」

「…今なら分かるだろう。やがて姿を現すであろうその者を抑えている者が。  
(拘束または抵抗を意味し、パウロは膨れ上がっていく背教を「引き止めている」  
自らの事を語っています)」

「不正の怪しき力は既に働いている。(それは罪や不正を肯定する「怪しい」  
宗教の事でした。)ただそれは、今はいなして(抑えて)いる者が居り、その者は  
自分が排除されるまでいなし(抑え)続けるだろう。」(テラソニケの使徒への手紙II、  
2章1-7節)

ここで私達にも、エルサレムに身を落ち着け、自分を神聖だ!とか、神だ!と主張  
する人間の指導者の存在が見えてきます。

「排除される」という表現は、論争的になる事があります。ギリシャ語の動詞、  
ginomaiは「存在する」という響きがあり、パウロを指した抹消される者、または  
「排除される」と言う意味合いよりは、むしろ「その者が『存在する』と認識される  
までは」または「その者が何者であるか明らかになる」と言う方が意に沿った解説の  
仕方なのかもしれません。どちらにしろ、その意味するところは、パウロが初期の  
教会において、実質上背教全てに対する最後の抑止力の一つであったという事であ  
り、彼の死後、東の世界でそれを生き延びる者は一人としていないという事です。

パウロの書もまた預言的なものです。なぜなら彼は、彼の死後数年の事のみならず、  
終焉の時の事まで記述しているからです。

徐々にではあるが、第一、第二世紀の教会は劇的に変わっていきました。そして少し  
ずつ、異教徒の習慣が取り入れられていきました。教会を訪れる異教徒は、彼らと  
共に迷信や彼ら特有の様々な休日や祝日を持ち込みました。

更なる金や権力、信者を望んだ自由主義の牧師達が、それらの異教徒の習慣を許可  
し、「キリスト教の」ものとして仕立て上げました。権力に飢えた指導者の中には、  
人々に対して独裁的な権力を行使し、教会の物理的主権を牛耳る者もいました。ヨ  
ハネは権力を欲し、墮落した人の権力にその身を売った者を残して、正当な信者達  
を集会から「追い出した」「ディオトレフェス」について書いています。(ヨハネの  
手紙III)

過ぎこしさい ふかつさい あんそくび にちようび す か  
過越際は復活祭に、安息日は日曜日に挿げ替えられました。クリスマスはキリストの  
たんじょうび ふめいかく せいれき ねん  
誕生日を不明確なものにしました。西暦325年のニカイアの会議に至る頃には、真  
のキリスト教徒は安息日やニサンの14日の過越祭を祝い、神に従い続ける事によっ  
て、「ユダヤ人化する事」に対し深刻な警告を受けていました。その代わりに、彼ら  
は豊潤と性交の女神を敬う異教徒の祭り「イシュタール」を祝うよう命じられまし  
た。それは、多産のウサギと卵のシンボルや他の「神秘的な」用具を使った、春に  
行われる祝い事でした。

じだい いま な きょう せかい おお いきょう きょうかい つ  
その時代から今まで、名ばかりの「キリスト教」の世界が大なる異教の教会に付  
き従ってきたのです。数百万人の人々が「イシュタール」（イースター、と今日で  
は発音される）をウサギと卵で祝い、東に昇る太陽を仰ぎ、「ホットクロスパン」  
（牡牛座、タンムーズ、またはニムロデを象徴する言葉bousまたはbounに由来）を  
食べ、「キリスト教」に仕立て上げられた異教の祝い事を楽しんでいます。

けっか きょう いつわ なぞ いきょう しゅうきょう くだ  
結果として、「キリスト教」を偽ったこの「謎めいた」異教の宗教に下った  
なんひやくまん ひとびと こうてい おうたち きょうかい ちから みと え じょうきょう つく かれ  
何百万という人々が、皇帝や王達に教会の力を認めざるを得ない状況を作り、彼  
らの支配権とおそらく命までも奪う事となったのです。

かみ しん きょうかい せいがい あ  
神の真の教会は政界に在らず

かみ げんしゆく けいこく しんと ぜったい ゆらい なぞ しゅうきょう  
神は厳粛に警告しました。信徒は絶対に、このバビロンに由来する謎めいた宗教、  
それが示す興味や政治的な目的、戦争、または政治制度に関わってはいけないと。

わたし てん べつ こえ い き わ たみ かのじよ はな  
「私はまた、天から別の声がこう言うのを聞いた。『我が民よ、彼女から離れなさい。  
その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないように。』彼女の罪は積み積  
って天に達しており、神はその不義を覚えておられるからである。」（黙示録18章  
4－5節）

もくしろく しょう じゅつこく けもの ちから さいしゅうてき しょうふ きら こと  
黙示録の18章には、十国の獣の力が最終的に「その娼婦を嫌う」事となり、そ  
の偽の教会をことごとく破壊し、その無数の人々や幹部を死に追いやる事が詳細に  
記されています。神はようやく、神の信徒を迫害かつ拷問する、醜くよためく宗教  
という名の女を、最も深い神の怒りの杯をもって罰するのです！だから神は彼の



信徒に、「その女の疫病が移らぬように」、その謎めいた宗教を捨てる事を望んでおられるのです！

キリストは弟子達にこう言いました。「世があなた方を憎むなら、あなた方を憎む前にわたしを憎んでいた事を覚えなさい。」

「あなた方が世に属していたなら、世はあなた方をその一部として愛したであろう。だが、私があなた方を世から選び出したが故に、あなた方は世に属してはいない。だから、世はあなた方を憎むのである。」（ヨハネの福音書15章18-19節）

彼の死と復活の直前に、キリストは御父に祈る際こう続けています。「私は彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。私が世に属していないように、彼らも世に属していないからです。」

「私は、あなたが彼等をこの世から取り除くのではなく、邪悪から守って下さるよう祈ります。」

「私が世に属していないように、彼らも世に属していないのです。」（ヨハネの福音書17章14-18節）しかし、偽の教会はこの世に属しています。それは政府として機能する政的機関であり、その大使を全ての国に遣わしています。その指導者は常に王族や貴族、大統領や皇帝の機嫌を取る事で、彼等に受け入れられ、好かれ、そして彼らに影響を及ぼしてきました。

しかし、イエスは言いました。「私の王国は、この世には属していない。もし、私の国がこの世に属していれば、私がユダヤ人に引き渡されないように、私の僕が戦った事だろう。しかし、実際、私の国はこの世には属していない。」（ヨハネの福音書18章36節）

ヨハネはこう書き記しています。「世も、世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にありません。」

「なぜなら、肉体の欲、目の欲、命の驕りといったこの世のもの全ては、御父ではなく世に属しているからです。」

「そして、世は過ぎ去って行き、その欲望も…」 (ヨハネの手紙I、2章15-17節)

「世」という言葉は制度の事であり、文明や共同体、都市や世界中の政府、そして、習慣や宗教、哲学的な概念を含めた社会そのものを意味します。

神の僕は、やがて来るキリストの天国の様な王国、神の政府の「市民」なのです！この世において、彼らは「旅人」の様なものであり (ペトロの手紙12章9-12節)、市民権を持たず、外国を旅している「見知らぬ者や巡礼者」の様なものなのです。

イラクを旅するアメリカ人が、イラクのイランやアメリカに対する戦争に参加しますか？アフリカを旅するイギリス人がアフリカの選挙に投票したり、アフリカ軍に入隊したり、部族の魔術やブドゥーの儀式に参加しますか？

ですから、神は彼の真の教会に命じます。「主の為に、人の法令全てに従いなさい。それが、最高権力者としての王であろうと、悪を行う者を処罰し、善を行う者を褒める為に、彼が派遣した総督であろうと。」 (ペトロの手紙12章13-14節)なので、神の僕は法への従順、権威の敬い、そして自由や政府への感謝といった模範を示す事になっているのです。神の裁判所と対立しない限り、彼らはそれらの政府に従う事になっています。

対立した場合、神の僕はまず神に従い、そしてその市民政府が課す罰を甘んじて受け入れるのです。

その昔、ペトロと他の使徒達は権威に対してこう言いました。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」 (使徒言行録5章29節)

キリストの真の教会は決して政治組織になるようには意図されていませんでした。それは、キリストの「直轄の代弁者」と言い張り、地上に並ぶものは無く、キリストに次ぐ唯一の人間の指導者だと主張する、一人の男の絶対的な独裁に下るべきものではなかったのです！

これは偽の教会が犯した多くの冒涇の一つに過ぎません。自らにそれほど強大な力があると自惚れる者は、誰であっても神の機嫌を損ね、当然として自らの多大な愚かさの報いを受ける事となるでしょう！

ファウセットは述べます。「エンティオコス・エピファネスの様に、3番目の王国の反キリスト（ダニエル書8章）は神の仇敵であった。なので、神の相対因子である4番目の王国の最後の反キリスト（最後の「獣」の力）もまた然り。教会は異教徒とローマ教皇の横暴に耐えてきたが、改宗という迫害に未だ晒されている。彼は、ローマ教皇としてキリストの名を利用し、キリストに成り代わるだけでなく、「御父と御子を否定する」だろう（ヨハネの手紙I、22章）。迫害はキリストの再来まで続く。（Critical and Experimental Commentary、第4巻、422ページ）」

この偽の預言者は彼の従者を絶対的な権威で支配します！彼の偽の教義に従う事で、彼等はキリストと直接の繋がりを持たなくなり、キリストを通じて御父と繋がりを持つ事も出来ないのです！彼の民は、彼の機嫌を取り、従順に徹し、疑わず、闇雲に従った場合のみ「身内」と考えられ、神と精神的な関係を持っていると見なされます。

この様に、この偽の人間の指導者は、聖職者としてのキリストの地位そのものを強奪しようと企んでいるのです。彼は何人たりともキリストを通じて神に直接近づく事は出来ないとおし、彼等はこのたった一人の人間の指導者を介さなければいけないと！終いには、この偽の預言者の冒涇に塗れた余りある自尊心は、彼こそが「神だ」と主張する程に膨れ上がっていくでしょう！

ここで、獣の「像」たるこの大なる偽りの教会が、神に選ばれし人々に、どの様にして大なる艱難をもたらす共犯者となるのかを見てみましょう。

偽りの教会の「枷」

イザヤの預言は大なる偽りの教会を艱難においての主要な加害者としています。つまり、イスラエル十部族の捕囚の事です。「私は自分の民に対して怒り、私の遺産を汚し、お前の手に渡した。」（イザヤ書47章6節）

これは、自らを「諸国の女王」と称し、自分より出でた反抗する「子を失う事もない」と豪語する墮落した女、つまり偽の教会の事です。

ここには「携挙」は描かれていません。それどころか、キリストが預言し、全ての預言が明白に宣言している様に、艱難は聖者の殉教を伴うのです。（黙示録13章7節とマタイの福音書24章9節）

そしてこう続いています。「お前は彼らに憐れみをかけず、老人にも枷を負わせ、甚だしく重くした。」（イザヤ書47章6節）

思い出して下さい。獣と偽の預言者は神の民の殉教と、イスラエルの十部族とユダの捕囚に加担するのです！

大いなる偽りの教会だけが神の民にその枷を負わせるのではない事に注目して下さい！「シオンに住む我が民よ、アッシリア人を恐れるな。たとえ、エジプトがした様に彼らがあなたを棒で叩き、杖を振り上げて、その日が来れば、聖別によってあなたの肩から重荷は取り去られ、首の枷は砕かれる。」（イザヤ書10章24-27節）

「聖別」とはキリストの再来を指しています。

イザヤはこう言う、「その日が来れば（キリストが訪れる終焉の時）、主は再び御手を差し伸べて、御自分の残りの民をお救いになる。彼等はアッシリアを後にする。そして、神の民の為に尊い道が示される。彼等はアッシリアを後にする。ちょうどイスラエル人がエジプトの地を出た様に。」（イザヤ書11章11-16節）

しかし、イスラエルの十部族が紀元前721年から718年にアッシリアによって捕囚された時には、聖書には誰も戻らなかったと記されています。古代アッシリアからは奇跡的な大脱出はありませんでした。その代わり、バビロンがアッシリアを支配下に置いた時、捕えられていたイスラエルの民は、自らを捕らえたアッシリア人と共にヨーロッパやスカンジナビア、イギリス諸島へと放浪しました。

彼らの大部分は歴史の中から姿を消しました。幾つかの手掛かりが残っており、彼らを見つける事は可能です、しかし、イザヤ書11章に書かれている様な出来事はまだ起こっていません。明らかに、この預言はキリストの再来の時の事なのです。

ユダヤ人だけでなく、イスラエルの家の者、つまり現代のイスラエル人達は今いったい何処にいるのかって？彼等は古代アッシリア人を代表する現代のある国家と、偽りの教会によって捕らわれています。言い換えれば、イスラエルは獣の力と偽の預言者の捕らわれの身にあるという事です。

この偽の預言者とは、ダニエル書の「小さな角」の事であり、最終的にローマ帝国の最後の7本の頭を操る事となった政府の事です。

このダニエルの預言の「小さな角」とは、かつてローマを支配した三つの王国を覆した教皇制度の事です。その三国は一般的にパンダル族（西暦429-533年）と、476年のローマ帝国の崩壊か493年までオドアケルが率いていたヘルリ族と、493年からベルサリウス将軍が554年にカルタゴを奪還するまでの東ゴート族の事だと信じられています。

教皇制度の影響力は、それらの王国の討伐と、554年ごろのローマの「帝国復興」に欠かせないものでした。

そして今、大口を叩き「時世や法」（日曜を基盤とした暦や教義を定着させる事）を変えようと企んでいる「小さな角」は、その「獣」の残りの7つの頭を支配します。これらはいわゆる「神聖ローマ帝国」の連なった頭であって、それは第二次世界大戦下で、ヒトラーやムッソリーニによって弱い形で再生された機関と同じものです。

ムッソリーニは自分の政府を「神聖ローマ帝国」の復興と呼びました！ファウセットはこう認めます。「ローマ帝国は、自らをアレキサンダー大王の帝国に由来するものだとは言いませんでしたが、ゲルマン帝国は自分達を「神聖ローマ帝国」だと呼んでいます。」（Critical and Experimental Commentary 第四卷 419 ページ emphasis mine より）「神聖ローマ帝国」はイタリアではなくドイツに由来するものだったのです。

「小さな角」によって滅ぼされた最初の3人の王でさえ「チュートン人（ドイツ人）」だったのです。

ヨハネは次の様な神託を受けました。「あなたが見た獣は以前は在り今は無く、やがて底なしの淵から這い上がり（サタンに由来する事を象徴的に表す「淵」）滅びに至るものである（ですから、これは最終的にキリストによって滅ばされる最後の獣なのです）。」（黙示録17章8節）

大いなる偽りの教会の指導者は、聖書の偽の預言者であり反キリストなのです！

その男こそがダニエルの「小さな角」なのです。彼こそがテサロニケの使徒への手紙IIの中にあつた「罪なる者」であり、「荒廃をもたらす忌まわしき者」が擬人化されたものなのです。なぜなら、その男こそが神の教会に居座り、自分が神であると冒瀆的な主張をする者なのですから！

その獣の象、つまり偽の教会が、何百万人もの人達を誤魔化し騙す為に、奇跡を起こすサタンの力を持つ事となるという神の言葉を覚えていますか？

「やがて汚れ（「邪悪な者」）が現れるが、主はその者を御自分の口の吐息で殺し、降臨なされる際の輝きによってそれを滅されるでしょう。」

「その者の全ての力と徴、虚実や奇跡は、サタンのそれに纏わつたものであり、」

「そして、猜疑心や不正を胸に秘めた者達は滅びる（滅びゆく）。何故なら、自分達が救われうるといふ真実の慈愛を受け入れようとしなかつたからである。」

「故に、神は彼らが虚実を信じるように強力な幻覚をお送りになるでしょう…」（テサロニケの使徒への手紙II、2章8-11節）

この偽の預言者は神殿の中に居座るでしょう。その男は自分が「神聖である」と主張するでしょう。その男は、何百万人もの人々が騙されるよう、甚だしい偽りの驚異や奇跡、そして怪しい「啓示」を示すでしょう。彼らはこの男をまるで「神そのもの」であるかの様に敬い「崇める」でしょう。

キリストが地上に再来され、まず始めに行われる事の一つは、この大それた、嘘つきで思い上がった、冒瀆的な偽の預言者を破壊する事です。「そして、獣は囚われ（捕縛や逮捕）、それと共に、獣の加護の元で奇跡を偽装した偽の預言者や、彼に騙

され 獣の刻印を受け取り、獣の象を崇拜した者達も囚われた。彼等は生きたまま  
硫黄の燃え盛る火の池に投げ込まれた。」（黙示録 19 章 19 – 21 節）

## 注意すべき事

というわけで、まとめると、キリストは明確にこう語ったのです。「ひどい破壊と  
荒廃をもたらすこの神の冒流者は」、彼が立つべきではない聖地に立つだろうと！

キリストがこれらの言葉を発した時、その教会はまだ健在でした。キリストの信奉者  
は、キリストが神殿のどの場所を意味したのかはっきりと知っていました。それは  
神殿のもっとも奥の、「聖地」と呼ばれる場所であり、神父が毎日供物を奉げた  
「聖地の中の聖地」でした。それは、最高司祭が年に一度の「贖罪の日」にのみ入る  
事が許された、ヴェールの後ろに位置していました。

パウロははっきりと言いました。「罪なる者」は神の神殿に居座わると。

しかし今日、エルサレムに神殿はありません。

しかし、熱狂的なシオン主義のユダヤ人がその神殿の壁に向かって行進し、他の  
「神殿」の建物に象徴的な礎石を置こうとした時、大きな国際摩擦が生じるので  
す！

アラブ人のユダヤ人に対する憎しみに燃えた敵意は、部分的に、新しいユダヤ教の  
教会を建てようとしてユダヤ人の右翼派閥が岩のドームやアル・アクサ・モスクを  
破壊しようとする意図に起因します。

そのような神殿が建てられた時は、この記事に書かれた最後の事象がすぐそこまで迫  
っているのだと覚えておいて下さい。

考えてもみて下さい。この様な出来事は他に例の無いアラブ諸国の結束をもたらすで  
しょう。中東で化学兵器や核兵器さえも用いた大きな戦争も起こり得ります。なぜな  
らアラブ人は、彼等が最も敬いイスラム人全てにとって神聖な、モスクの内2つの  
破壊を目撃する事になるかもしれないからです。

かれら ぜんれい な ほど けつそく かた かれ しどうしゃ しよ しよう  
彼等は前例に無い程の結束を固め、彼らの指導者はおそらくダニエル書 11 章 40 -  
45 節の「南の王」となるでしょう。

わたしたち けもの ちから れんごう かんが きた おう あつりよく  
私達が「獣の」の力、またはヨーロッパ連合と考えている「北の王」に「圧力を  
かける」ために、このアラブの指導者はヨーロッパへのエネルギーの供給を止める  
かもしれません。これは、ダニエル書 11 章にある様に、早急な軍事的対応を呼び  
起こす事となるでしょう。

ヨーロッパに、おそらく「ヨーロッパ合衆国」と呼ばれるであろう十の連合国が見  
られた時。それが突然中東に介入した時。世界的な教会の指導者が、ヴァチカン  
エルサレムに移し、「唯一の真の教会」をその誕生の地に戻すと宣言した時。彼が  
エルサレムは自治領または解放された国際都市となり、軍事介入から免除されるべき  
だと宣言し、それを保証する為に「自らそこへ赴いた」時。州の教会を含む主要  
な教会がその母なる教会へと帰属するという奇跡を見た時。その男が、何百万の  
人々が称賛するがままに、自らを「世界を核による破滅から救った者」だと、大そ  
れて自惚れた宣言をした時。彼がキリストの様に敬われ「神」の様に称賛された時。  
そんな時は「気を付けて」下さい！

なぜなら、これらの事象の存在は、大いなる艱難が「始まっている」ことを意味する  
からです！

もし、何百万人もの人々が口付けを交わし、ローマのペテロとされている、ビザンチ  
ンかギリシャ系の奇妙に黒ずんだ有名な銅像が神殿の内部に移され、彼が神殿の中に  
身を落ち着けた時、忌まわしき者の設置は完了し、想像を絶する恐ろしい「破壊」が  
すぐに始まるでしょう。

それがアメリカ人やイギリス人、オーストラリア人やカナダ人、南アフリカ人そして  
北西ヨーロッパの民主国へもたらす結末は想像さえつきません！

キリストが仰った様に、理解する心を持った人々を神がお救いになることを。  
神が、あなた自身「気づいている」、人生において改善しなければならない事を成し  
遂げる力をお与えになることを。罪を悔い改め、キリストを救世主として呼び求め、



キリスト御自身の体、つまり精神的な依代とも言える彼の真の教会の一部となる力を、神があなたにお与えになることを！

キリストは言いました。「多くの者が呼ばれるが、選ばれる者は殆ど居ない。」神はあなたをお呼びになられましたか？あなたがこれらの証拠や警告の言葉に目を通したのはただの偶然でしょうか？それとも、神御自身があなたの人生を通して何かの目的のために働いておられるのでしょうか？まだ時間がある内、考えそして祈って下さい、に。

— おわり 終 —

この資料は、内容を改ざんせず、著者と出版社を明確にした上でなら、コピーして友人や家族に無料で配布する事が出来ます。一般大衆向けに出版する事は出来ません。

この出版物は個人的な探求の道具として利用されるよう意図したものです。どんな内容でも人の言葉をそのまま受け入れるのは賢明ではないという事を理解し、全ての事柄に関して、あなたはご自分で聖書に基づいて証を立てるようにして下さい。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱 747 Flint、テキサス 75762

電話番号：(903) 561-7070 Fax: (903) 561-4141

なお当福音協会のウェブサイトでは多くの文献が無料で入手できます。

[www.garnertedarmstrong.org/](http://www.garnertedarmstrong.org/)

ガーナーテッドアームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とキリスト・キリストの教えに従って福音を説く、協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。